

OFFICIAL
Advanced
Dungeons & Dragons®
COMPUTER PRODUCT

カース・オブ・アジュア・ボンド
冒険者ジャーナル





はじめに

もししくは

「われわれは、ティルヴァートンでいったい何をしているのだ？」

記録1

「わたしは、新しい日記を書き始めようとしている。前の日記は、ほかのすべての荷物と一緒になくしてしまった。こうやって、日記を書き綴ることで、断片的な記憶をいくらかでも整理できれば幸いなのだが。

失踪したコアミアの王女、ナカシアを捜すため、南の地、ティルヴァートンにやってきたという点では、わたしたちの記憶は一致している。ティルヴァートンは、〈谷（デイルランド）〉とコアミアの境にある街だ。そして、王女が見かけられた最後の場所だ。

アズウン王の一番下の娘、ナカシア王女は一年前にコアミアの王室を逃げ出したという。政略結婚を嫌がり、ティルヴァートンからやってきた、ゴンド神に仕えるジャーリーという名の僧侶と駆け落ちしたのだ。

もっとも最近の情報では、ナカシア王女とジャーリーとは仲たがいをしたということだ。そして、ティルヴァートンの近くで彼女の姿が見かけられたという。王はナカシア王女を連れ帰る者に莫大な報酬を約束した。わたしたちのような冒險者にとっても、王女を見つけ、王のもとに連れ帰れば、権力者を味方につけることができるというわけだ。目先の利く者なら、このチャンスは見逃さないだろう。

ティルヴァートン近くの街道で、わたしたちは襲撃を受けた。魔法によってだろうか、賊たちは姿を消していた。何が起こっているのかわからないうちに、わたしたちの大半は倒されていた。邪悪な兜に隠れた黒いいくつの顔が、わたしたちのただなかに石弓を射かけていたのだけが、ぼんやりと思い出される。致命的なものではなかったが、石弓に射たれるたびに、仲間は倒れていったようだ。わたしは腕に一撃を受けたのを覚えている。傷口は火のように熱く燃え上がった。わたしはめまいに襲われた。意識を失う直前、最低の結果だと思った。わたしたちのような経験を積んだ冒険者が、こんな最期を迎えるとは。

だが、わたしたちはティルヴァートンの宿屋で目覚めた。わたしたちの怪我は治療されている。装備はすべてなくなっていたが、白金貨が一包み見つかった。まずは、新しい装備を買い整える必要があるだろう。

宿屋の下働きが、日付を言うのが耳に入った。だが、それを信じていいものだろうか。下働きの言うことが正しいのだとしたら、わたしたちが不意討ちを受けてから、一ヶ月が経っていることになる。それだけの時間があつたら、何が起こっていても不思議ではないだろう。

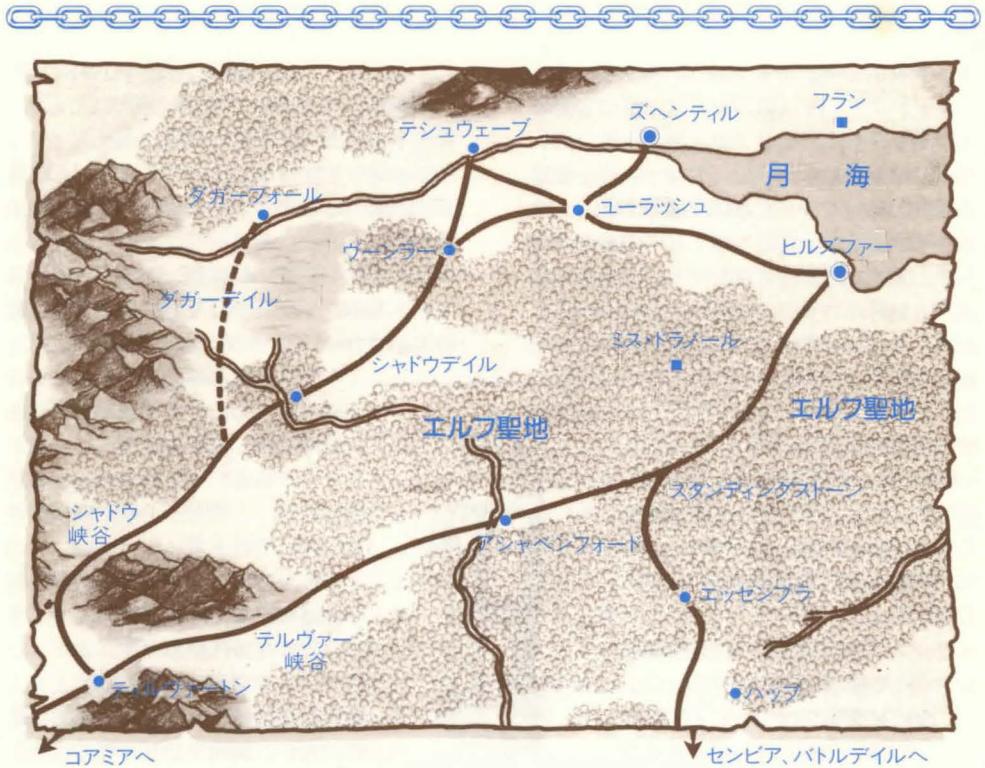
何かは、起こっていたようだ。目覚めたとき、わたしたちのひとりひとりの利き腕には、紺青色のシンボルが刻まれていた。それは、刺青ではない。膚の下につけられているようだ。ときおり、それが動いているのが感じられた。



わたしたちは反撃を試みることにした。魔法を使う者は、呪文を準備しよう。新しく武器や鎧も買い整えよう。そして、ティルヴァートンの街に出て何が起こっているかを調べよう。誰か手がかりを知っている者がいるに違いない。この街のあらゆる賢者、司祭、それに酒場の主人のもとに押しかけることになろうと、それは真実を見つけるためだ。わたしは気にしない。

わたしはこの日記に、集めた情報をすべて記録していくつもりだ。情報はわたしたちの旅にとって大事なものになるだろう。

(以後、ゲームで得た情報は、冒険者ジャーナルに収められたこの「冒険記録」を参照してください。10ページから「冒険記録」は、再開しています)



〈ディルランド〉の主要地域

この地図は南西端のティルヴァートンから、北東端のフランまで広がっています。〈エルフ聖地〉の中央部、〈月海〉の西海岸、〈エルフ聖地〉をとりまくいくつかの谷あるいは村々も網羅されています。この地域に、まばらに人間たちは住んでいます。人口が集中しているのは都市、街、それに点在する谷間にある農村です。地図に載せられている地名を次から解説しましょう。

ヴォンナーは〈ズヘンティル城塞国〉と同盟している邪悪な都市です。ヴォンナーの軍隊は何度も〈影の谷〉を侵略しようとしてきましたが、そのたびに撃退されています。

〈エルフ聖地〉は〈月海〉付近のエルフの文明地の中心であった、広大な森です。エルフたちが〈撤退〉で去ったとき、エルフ聖地に

住むものになりました。エルフたちの管理がなくなり、邪悪な魔物たちが深い森の中で殖え始めました。これらの魔物がやがて周囲の〈ディルランド〉への脅威となることを恐れる者もいます。

エッセンブラは〈戦いの谷〉における商業の中心地です。〈戦いの谷〉は、さまざまな争いの舞台となってきました。多くの歓迎されるものたちが、自分たちの土地を荒らすのを避け、〈戦いの谷〉で戦争をすることを選びました。〈戦いの谷〉は、エルフたちの撤退によって、以前の勢力を失っています。

コアミアは〈ディルランド〉の南、そして、西に位置する、文明の進んだ大国です。コアミアの軍隊はティルヴァートンの街を併合することで、国境を北に広げました。コアミアがさらに〈ディルランド〉に侵攻してくる計



画を準備しているかどうかは不明です。

シャドウデイル（影の谷）は、街の名であり、同時にその周囲の土地も指します。アシヤバ川がティルヴァートンとヴーンラーを結ぶ街道と交差するところに位置します。シャドウデイルは冒険者たちにとっての安息所であり、成功した冒険者たちがもたらす力、保護、富を喜んで受け入れます。シャドウデイルは、高名な賢者、エルミンスターの故郷でもあります。

スタンディング・ストーンは、エルフが〈デイルランド〉への人間の入植を認め、許諾書にサインした場所を記念して建てられた記念碑です。この記念碑は、ミス・ドラノールの廃墟へ通じる道の目印にもなっています。

〈ズヘンティル城塞国〉は大きな都市で、邪悪な〈ズヘンタリム〉によって政治を支配されています。都市はその影響力を南と西とに拡張してきており、その力がさらに広まること人々は恐れています。

ダガーフォールは、テシュ川沿いの農村であり、〈短剣の谷〉中、最大の集落です。ダガーフォールの住人は、他所の人間を嫌っています。〈ズヘンティル城塞国〉が、自分たちの独立を破壊してしまわないかどうかを、こここの住人はひどく恐れています。

ティルヴァートンは、〈デイルランド〉の南西、コアミア王国の国境にある小さな街です。ティルヴァートンは、最近コアミア警備軍に占領され、第7師団の統治下にあります。しかし、占領は平和的に行なわれつつあり、ティルヴァートンの住民はコアミア王国の保護下におかれることで安心しているようです。

〈デイルランド〉は、広大な〈エルフ聖地〉を取り巻く肥沃な土地を指します。〈聖地〉の周囲には多くの谷間があります。〈影の谷〉、〈や

どり木の谷〉、〈戦いの谷〉、〈短剣の谷〉です。

テシュウェーブは、中程度の都市で、〈ズヘンティル城塞国〉の軍隊が最近占領しました。占領は穏やかに行なわれ、〈ズヘンティル城塞国〉の兵士たちは、テシュウェーブの住民は臆病だと思っています。

ヒルズファーは、かつて、〈エルフ聖地〉のエルフト、〈月海〉沿岸の人間たちの間の商業の中心地でした。エルフたちの撤退によって、

この街は冷酷な独裁者が支配することになりました。この独裁者は〈赤い羽根飾り〉部隊を拡充し、ユーラッシュの廃墟で、〈ズヘンティル城塞国〉に対し、休むことなく軍事作戦を展開しています。

ミス・ドラノールは〈エルフ聖地〉中央部にある、エルフたちの住んでいた大きな古代都市です。エルフたちが〈エルフ聖地〉を去ったとき、都市は見捨てられました。邪悪な魔物たちが、エルフたちの魔力の地から生まれ、この都市を乗っ取り、足を踏み入れてはならない廃墟としています。

〈やどり木の谷〉は、静かな農村地帯です。もっとも大きな街はアシャベンフォードで、アシヤバ川がヒルズファーとティルヴァートンを結ぶ街道と交差しているところにあります。

ユーラッシュは、〈ズヘンティル城塞国〉から南の文明地へと伸びる唯一の商業路にある廃墟の街です。わずか前に〈ズヘンティル城塞国〉と、ヒルズファーの〈赤い羽根飾り〉部隊のこぜりあいがあり、現在は〈赤い羽根飾り〉部隊の統治下にあります。しかし、両者とも次の戦に備えて準備を整えています。



Gauntlet of Moander



（ディルランド）の主要勢力

ヒルズファーの〈赤い羽根飾り〉部隊は、ヒルズファーの側に立って戦う兵士たちをひっくるめて言う名称です。ヒルズファーの街は数多くの傭兵团を雇っています。これら傭兵团は、すべて目印として“赤い羽根飾り”をつけています。最近、〈赤い羽根飾り〉部隊は、大きく拡大しました。現在、廃墟ユーラッシュの支配権を〈ズヘンティル城塞国〉軍から奪い取ったところです。

賢者エルミンスターは、〈影の谷〉でもっとも有名な人物です。彼は年齢も定かではない、強力な魔法使いです。エルミンスターはもはや他の魔法使いの教師でもありませんし、雇われて動くこともありません。しかし、きわめて重要なアイテムや書物を調べ、〈フォーゴトン・レルム〉の平和を目指しています。

コアミア王家はコアミア王国を支配しています。王家は、強い戦士であり、公明な王であるアゾウン四世王が統べています。王の参謀であり、かつての教師に、強力な魔術師であるヴァンジャーダハストがいます。アゾウン王の娘の一人、ナカシア姫はほぼ一年前に失踪しました。ナカシアはティルヴァートンのゴンド神殿の一員である、〈ゴンド神の使徒〉ジャーリーという僧侶と駆け落ちしたという噂です。王は姫を連れ帰ったものに多額の報酬を約束しました。王が個人的に、お忍びで姫を捜しているという噂もあります。

〈ズヘンティル城塞国〉の軍隊は、都市の手先というよりは、むしろ、邪悪の集団である、〈ズヘンタリム〉の手先です。軍隊は最近、テシュウェーブの街を占領し、ヴーンラーへの道筋を警備しています。そして、ユーラッシュの廃墟ではヒルズファーの軍隊と戦争中です。〈ズヘンティル城塞国〉軍は、戦士、魔術使い、僧侶の連携に抜きん出ています。中程度のレベルの僧侶、魔術使い、戦士からなる〈恐怖小隊〉を使い、戦線をひそかにすり

ぬけ、背後から敵に多大な損害を与えるという戦法もとります。

〈セイの赤魔術師〉たちは、強力で偏執狂的な魔法使いたちで、セイ王国を支配しています。セイは邪悪な王国で、〈ディルランド〉のはるか東に位置しています。他の魔術師の欠点を暴き、魔力や政治力を高め、あるいは、セイを取り巻く敵どうしに大きな不和を起こさせる、といったことを行なうことで、〈赤魔術師〉はセイでの影響力を高めています。〈赤魔術師〉たちが関わっている限り、セイには〈フォーゴトン・レルム〉のあらゆる者が敵であるといえます。〈赤魔術師〉は一人ごとに、シンボルを持っています。

ティランスラクサスは、最近まで、廃墟の都市フランの内部や周辺で勢力を誇っていた邪悪な霊体です。ティランスラクサスは、人間型モンスターの軍隊でフランを支配し、そこを本拠地として〈月海〉沿岸を制覇しようとしていました。異界をつなげる、〈輝きの池〉と呼ばれる門から、魔力を吸い出していたという報告がなされています。ティランスラクサスのもっとも大きな能力は、強力な生物の身体を乗っ取り、その乗っ取った身体が死んだ後、そこから逃げることもできるというものでした。昨年、冒険者の一団がフランを解放し、ティランスラクサスを倒しました。霊体は〈輝きの池〉を通して吸い戻され、プールは、干上がってしまいました。

〈豎琴師たち〉は、高レベルの吟遊詩人（バード）や、レンジャーからなる秘密グループです。〈豎琴師たち〉の最終的な目的は謎に含まれていますが、善に協力していることや、〈ズヘンタリム〉のような邪悪に対抗していることは知られています。〈豎琴師たち〉の行動はほとんど、ひっそりしたものに限られていて、悪が企む計画をできるだけ最小限の力で解決しようとしています。

ファイア・ナイフ団（あるいは、フレイム・



ナイフ団とも呼ばれます)は、かつてコアミア王国全体に広がっていた、盗賊及び暗殺者組織です。コアミアのアゾウン四世王がファイア・ナイフ団を一掃してしまい、ファイア・ナイフ団は現在いどころを失っています。

ファイア・ナイフ団はアゾウン四世を暗殺することを誓い、最初の呪縛計画に参加してそれを果たそうとしました。最初の呪縛計画が失敗に終わった後、ファイア・ナイフ団の残党はコアミアの辺境に逃げのびました。彼らは、ふたたび王を倒す計画を立てていると噂されています。ファイア・ナイフ団のシンボルは、炎に包まれた短剣です。

〈ペインの信者〉は、〈月海〉沿岸に集中していますが、その影響力は〈フォーゴトン・レルム〉全体に広がっています。ペインは邪悪な神で、不和、憎しみ、暴虐を司っています。ペイン神のもっとも大きな神殿は、ミユールマスターにある、〈黒の王の祭壇〉です。二番目に大きな神殿が、〈ズヘンティル城塞国〉にある、〈暗黒の社〉です。ペイン神のシンボルは、赤地に黒い左手の手形です。

ミス・ドラノールの騎士団はミス・ドラノールの廃墟における、すさまじい力や終わらない災厄から、〈フォーゴトン・レルム〉を守ろうとしています。騎士団は、言語に絶する魔物たちを、都市から逃げ出さないように封じこめています。また、無知な冒険者たちが都市に入って、被害を受けないように目を光らせてもいます。

〈モーンダー神の信奉者〉たちは、暗黒の邪悪な神を信じています。その“神”的力は、ユーラッシュを中心としています。はるか昔、〈エルフ聖地〉のエルフたちは、モーンダー神を異界へと追放し、その力の大半を〈フォーゴトン・レルム〉から取り去りました。それ以来、モーンダー神への信仰は薄れ、今ではごく少数の狂信者を残すのみとなっています。最初に〈紺青の呪縛〉を作った中核とな

ったのが、この信奉者たちです。そして、モーンダー神を一時的に〈フォーゴトン・レルム〉に呼び戻したこともあります。ウェストゲートをめぐる魔法の戦いの後、モーンダー神はふたたび追放されました。モーンダー神の再追放の後、残った信奉者たちは、またも自分たちの主を〈フォーゴトン・レルム〉に降臨させようと、熱心に別の計画を立てています。モーンダー神のシンボルは、たなごろに口を描いた黒い手形です。

〈デイルランド〉のモンスター

つぎに、〈デイルランド〉周辺と〈月海〉の西方沿岸に見られるモンスターをいくつかあげておきます。ここにあげたモンスターは、ほとんどが恐ろしい存在ですが、その中でも抜きん出て強力なものもいます。

モンスターの名前の後に括弧書きで記されているのは、モンスターのレベルです。1レベルのモンスターは、装備をよく整えた初心者戦士よりも弱いくらいです。しかし、10レベルともなれば、英雄と呼ばれる者よりも強いことがあります。6レベルモンスターと7レベルモンスターの間では、その潜在的な強さに開きがあります。

アンクヘッグ (6)

大きな地中に穴を掘る虫で、巨大な顎を持っています。強い酸を吹くことが知られています。

エティン (7)

巨大な2つ頭のオークのように見えます。凄まじい力を持っていて、とげのついた棍棒を両腕に持つことができます。戦闘では、2本の棍棒は恐ろしいダメージを与えます。

エフリート (7)

〈火の精靈界〉から訪れた、大きく強い力を持つ生物です。尊大で、力のある主人にしか仕えようとはしません。



オウル・ペア (5)

大きな生物で、鋭く尖ったくちばしを持っています。相手を摑み絞めつけることで大きなダメージを与えます。

オーガー (4)

大きく、忌まわしく、醜い人間型モンスター。
ヒューマノイド
強い戦士でもあります。

オチューグ (6)

ごみなどをあさって食べています。長い触手を持ち、それを使ってごみを大きな口にすくいります。

ガス・スポア (2)

浮遊している球形の生物で、ビホールダー（後述）によく似ていますが、実際は恐ろしい生物ではありません。もし、ガス・スポアを攻撃した場合、爆発する危険があります。

グリフォン (6)

翼を持った獣で、大きな鉤爪と、鋭いくちばしを持っています。

クロコダイル (3)

強力な大顎を持った、大きな爬虫類です。

ケンタウロス (4)

善の種族で、半人半馬の生物です。そこそこの戦士であり、価値ある友人となりうるでしょう。

サラマンダー (7)

炎の生物で、摄氏150度以上を好み、赤熱した金属の武器を使います。

ジャイアント・スラッグ (7)

巨大な生物で、非常に強い酸を吐くことができます。鈍器による攻撃には強い耐性を持っています。

ジャイアント・スパイダー (5)

巨大で、牙に毒を持っています。

シャンブリング・マウンド (7)

この巨大な生物は、まるで動く苔や泥土の塊というように見えます。棍棒のような腕で相手を殴りつけ、相手を包みこんで窒息させることができます。泥土のような身体は炎には傷つけられず、電撃を受けければさらに強くなります。

ストーム・ジャイアント (9)

真に“巨人”と呼ばれるものの中で、もっとも強力で、恐怖を受けています。高い知性を持ち、体軀ははるかに優れ、そして、きわめて魔法的な存在です。強力な電光を放つことができます。

スリ・クリーン (6)

知性を持った肉食の虫人間で、穴を掘って住んでいます。4本の腕を持ち、牙には毒があって噛みついた相手を麻痺させます。飛び道具による攻撃をさっとかわす技に長けています。

ディスプレーサー・ビースト (6)

大きな、黒豹のような生物で、背中から2本の触手が伸びています。実際の位置から、1~2メートルズれた位置に、自分の姿を映し出すことができます。

ドッグ (2)

人間の忠実な召し使いは、訓練を受けて獰猛な戦士となっていることもあります。

ドラコリッチ (10)

〈ドラゴン教団〉が作ったものと言われる、アンデッドのドラゴンです。アンデッドとしての能力、ドラゴンとしての能力の両方を備えています。ドラコリッチの攻撃には、致命の息吹と、接触による麻痺の両方があります。

トロール (6)

大きく、力が強く、醜いヒューマノイドです。恐れというものを知らず、また、負傷を再生回復する能力を持っています。ただし、火によって受けた傷は再生できません。



ネオ・オチューグ (7)

オチューグの、さらに強力なモンスターです。むかつくような“あさり屋”で、いくつかのおぞましい攻撃と、厚く守られた身体を持っています。

バグベア (4)

おぞましい、巨大サイズのゴブリンで、身長が2メートル以上あります。バグベアは見た目はのろまですが、実際はこっそりと忍びよる技能に長けた、強くすばやい戦士です。

ビホールダー (10)

この強力な球形のモンスターは、10本の茎状の組織を持っていて、その先端には目がついています。そして、これらの目から致命的な攻撃を行なっています。ビホールダーの攻撃は、短距離ではきわめて致命的です。胴体中央にも大きな目があり、その力は魔法の威力を中和します。ビホールダーは〈フォーゴトン・レルム〉でも、もっとも強力なモンスターです。

ヒボグリフ (3)

勇壮な生物で、鷲の頭と前足、馬の後足を持っています。

フェイズ・スパイダー (6)

巨大な毒蜘蛛で、次元のはざまに出入りできる能力を持っています。しばらくは、次元のはざまに潜んでいて、その後、出てきて攻撃を行ないます。

ブラック・ドラゴン (7)

恐ろしいドラゴンで、酸を吹きつけます。また、強力な爪と牙による攻撃を行ないます。

ベジピグミー (3~4)

わずかに知性がある、動く植物です。いろいろな体格をしていて、ときおり、武器を使用します。

ヘルハウンド (6)

異界の生物で、狼に似ています。炎を吹き、透明な敵を感知する能力を持っています。

マーゴイル (5)

石のようなモンスターで、魔力を持たない武器では傷つけることができません。そして、鋭い鉤爪とトゲを用い、多くの回数攻撃を行なうことができます。

マンティコア (6)

翼のある獣で、尻尾からトゲを射ち出すことができます。トゲはクロスボウの太矢と同じだけの威力があります。

ミノタウロス (6)

強い、牛頭のヒューマノイドです。残虐な人喰い生物で、迷路の中でよく見かけられます。

メデューサ (6)

髪の毛が蛇になっている、恐ろしい女性です。睨みつけて人間を石に変えることができます。

モンキー (2)

特別な命令を実行するよう、盗賊によって訓練されていることがあります。

ラクシャサ (7)

悪霊で、幻覚と偽りの言葉で獲物を無防備にします。ひとたび戦闘になれば、ラクシャサは強力な戦士兼魔法使いであり、自身はほとんどの魔法を無効化できます。祝福を受けたクロスボウの太矢で射れば、ラクシャサは即死します。

リザードマン (3)

トカゲに似たヒューマノイドです。雑食性ですが、特に人間の肉を好んでいます。

ワーグ (4)

邪悪な性癖を持つ、わずかに知性がある狼です。他の魔物と協力し、集団で襲いかかってくることがよくあります。

ワイバーン (7)

ドラゴンの遠い親戚にあたります。牙と、尻尾の毒トゲを用いて戦います。



〈ディルランド〉と〈エルフ聖地〉における歴史概略

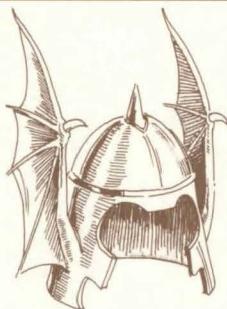
1357年前、北へ向かった人間たちは、〈エルフ聖地〉にぶつかりました。〈月海〉のすぐ南に、巨大な森が姿を現わしたのです。人間たちはエルフの指導者たちに、森の周辺の谷間に入植する許可を求め、それを受けることができました。これを記念し、スタンディング・ストーンが建てられました。

この同意によって、〈ディルランド〉にさまざまな人間の集落が生まれました。これらの集落には、〈影の谷〉、〈やどり木の谷〉、〈短剣の谷〉、〈戦いの谷〉があります。個々の集落には、人口増加の中心となる街が生まれました。それぞれ、シャドウディル、アシャベンフォード、ダガーフォール、エッセンブラーです。〈エルフ聖地〉の南東には人間たちの住むセンビア王国が広がっていました。センビア人たちは森の木々を切り倒し、船を作る板材にしようとしました。

エルフたちは473年前、〈歌う矢の戦い〉でセンビア人を撃退し、これをやめさせました。その後、エルフたちはセンビアからスタンディング・ストーンを通り、〈月海〉へとぬける街道を作ることを認めました。この街道が〈月海〉で終わる場所に、ヒルズファーの街が繁栄を始めました。

〈エルフ聖地〉の南西には、コアミア王国が広がっています。コアミア軍は、最近、国境の街ティルヴァートンを占領しました。しかし、それ以上の拡大は〈砂漠の口山脈〉の南端に阻まれています。シャドウ峡谷とティルヴァー峡谷が山脈を抜けていますが、コアミア国王は、まだ、あえてこの危険な山道に軍隊を進めようとはしていません。

〈月海〉沿岸には、ヒルズファーをはじめと



Helm of Dragons

する街が広がっています。〈ズヘンティル城塞国〉が興り、いったんは弱まつたものの、〈ズヘンタリム〉の力のもとにふたたび勢力を強めています。フランの街は爆発的に勢力をきわめましたが、飢餓のために荒廃し、さらにはドラゴンのために滅ぼされました。その後、フランは邪悪な支配を受けていましたが、冒険者の一団によって解放されました。

〈エルフ聖地〉の北には、〈ディルランド〉からはずれて、街々が興りました。ユーラッシュユは、モーンダー神の信仰の中心として栄えました。しかし、その後、エルフがモーンダー神を〈フォーゴトン・レルム〉から追放しています。テシュウェーブは川の街として大きくなりましたが、現在では、〈ズヘンティル城塞国〉に占領されています。ヴーンラーは〈エルフ聖地〉の端に興り、〈影の谷〉への侵攻を、何度も押し戻されてもなお行ない続けています。〈エルフ聖地〉の周囲で、人間たちは集り、街を作り、未開の地を開き、そして、自分たちの都合のいいように土地を作り変えようとしています。

〈歌う矢の戦い〉とセンビアからヒルズファーへ伸びる街道は、エルフたちの間に、大きな論争を引き起しました。エルフと人間が、膝をつきあわせて生きていけるものなのか？あるいは、人間の拡大がエルフの生活に脅威とならないのか？何百年も、エルフは、ひそかに自分たちの間で、議論を繰り返しました。^{ザ・トリートメント} 最近、エルフたちは結論を下しました。^{ザ・トリートメント} 〈撤退〉を始めたのです。

〈撤退〉は、〈エルフ聖地〉の周囲の人間たちが気づかないうちに実行なわれました。ほとんど一夜のうちに、〈聖地〉の住民と立派なミス・ドラノールの街が消えてしまったかのよう



した。エルフたちは、いったん立ち去ることを決めたら、すばやく行ないました。〈エルフ聖地〉の外の居住地に住んでいたエルフたちは、一部は立ち去り、一部はそのまま新しい故郷に残りました。
ザ・リトリート

〈撤退〉は、広大な地域を空虚な状態にしました。邪悪なものどもが、この勢力の真空地帯をすばやく利用しました。明るいエルフの森は、あっという間に暗く危険な場所になりました。伝説に唄われたミス・ドラノールの街は廃墟となり、邪悪な魔物たちが占拠しました。センビアからヒルズファーへ抜ける街道は、もはや商人たちにとって安全ではなくなり、冒険を行なう者に危険な難所となつたのです。
ザ・リトリート

〈撤退〉の後に襲ってきたのは、〈群竜の飛翔〉でした。何百ものドラゴンが北から飛来し、

〈デイルランド〉の街々を荒らしたのです。多大な犠牲を払ってドラゴンは追い返され、あるいは倒されました。ヒルズファーの港は、墜落したドラゴンの死体のために、何週間も閉ざされました。魔女シローネと巨大なドラゴンとの戦いは、〈影の谷〉の一画にクレーターだけを残して終わりました。しかし、〈飛翔〉は、来たときと同様、あっという間に終わりました。ドラゴンたちが去った後、集落は收拾を始め、人々は営みをやりなおし始めます。
ザ・リトリート

今では、〈デイルランド〉の住人は〈撤退〉以降エルフがいなくなつたことにも慣れ、〈群竜の飛翔〉から受けた被害も昔話になりました。彼らは作物がたわわに実った畑に軍隊がせめぎあう未来をみています。子供たちは冒険者となることを夢見て大きくなっています。



プール・オブ・レイディアンス

フランと〈輝きの池〉に関する吟遊詩人の記録

フランは爆発的に勢力をきわめたが、邪悪なモンスターたちに襲われ、その圧倒的な力の前に屈した。廃墟の街は強力な靈体によって支配を受けることとなった。この靈体は「ザ・ボス」としてしか知られていない。

ザ・ボスがさらに多くの地域を制覇しようと外に目を向けている間に、人間たちはフランの端に入植し、足がかりを作った。冒険者たちが伝説に語られる富を目指し、街へと集ってきた。

フランを浄化しようとす
る戦いは、勇壮なものだった。まず、冒険者たちは街を一区画ごとに掃討していく。次に、街のまわりにある、邪悪なモンスターや人間たちが集っている場所を見つけ、打ち倒していく。そして、最後に冒険者たちは邪悪のリーダーが支配している王城を急襲した。

冒険者たちは戦い、王城の最深部へと迫りついた。

そして、名高いザ・ボスが、

「炎のものティランスラクサス」と呼ばれる
悪靈であることをつきとめた。ティランスラ
クサスは巨大な青銅竜の身体を乗っ取り、

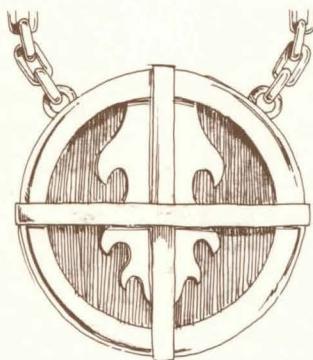
ブルー・オブ・レイディアンス
神秘の〈輝きの池〉を自分のすみかへと運びこんでいた。〈プール〉は次元をつなぐ門であり、ティランスラクサスに異界の情報と力を与えていた。

ティランスラクサスは、ただでさえ恐るべきドラゴンの戦闘能力に、自分の魔力もつぎこんだ。さらに、彼には魔法の武器防具で身をかためた一団の近衛兵たちも従っていた。冒険者たちは、英雄的な戦いの結果、ようやくティランスラクサスとその手下を打ち破ることができたのだ。

ティランスラクサスは倒されても、死ぬことはなかった。靈体はドラゴンの身体から抜け出て、〈輝きの池〉を通じて異界に吸い戻されたのだ。だが、〈プール〉は涸れ果て、ティランスラクサスの力は失われた。フランは解放されたのだ。

しかしほとんどの英雄たちのように、フランを解放した冒険者たちも長く一つの場所に留まってはいなかった。彼らは船に乗り、〈月

海〉を渡ってフランからヒルズファーへ行ったことが知られている。そして、さらなる冒険を求めてヒルズファーから南西に向かったと噂されている。



Amulet of Lathander



冒険記録

この記録は、冒険者たちが旅の途中に書きとめたり、手に入れた情報をおさめてあります。ゲームの途中、この記録の番号を指示されることがあるでしょう。「冒険記録のX番を見ること」というふうに指示されたときは、その番号を参照し、四角にチェックを入れてください。指示されていない番号を先に見てはなりません。中には偽のものもあり、冒険を誤った方向に導くでしょう。

記録2

召集されたドラゴンたちは、^{エジション}上空からパーティ一覧をつけた。それぞれ、〈太古葬〉のドラゴンたちだ——赤竜、緑竜、青竜、黒竜、白竜だ。一頭の声が轟きわたった。「定命なるものどもよ、我らと対峙するに最低の時に現われたものだ。すぐに立ち去るがよい。さすれば、我らは手を出さぬ」

ドラゴンの寛大な申し出について考えをめぐらせていたそのとき、凄まじいはばたきの音が聞こえてきた。ドラゴンたちはすばやくみたちを後ろに追いやり、なにもからか見えないように隠した。あるいは、祈りを捧げるよう頭を垂れるものもいる。巨大な、悪竜の女王がドラゴンの群れの中央に降り立った。五つの首が周囲を見渡す——ティアマットが降臨したのだ。

記録3

「その〈呪縛〉が何か、あたしは知りすぎるほど知っているわ。あたしも〈呪縛〉を受けていたから。」マスター・バーべー

〈豊琴師の長〉が、自分の作品を最初のまま残しておきたい、と思ったときからすべてが始まったわ。人に見聞きさせるものは、時間が経つうちに変えられて、つまらなくなる。〈長〉は自分の歌や詩もそうなると思って、それをひどく気にしたのよ。〈長〉は、一種のフレッシュ・ゴーレムを作る実験をしてみた。自分の作品を全部おさめた、絶対に死がない複製人間ね。それで、時の影響を免れようと思ったの。

運の悪いことに、〈詩人の長〉は、『人間』を作

るときに失敗して、助手が一人死んでしまったのよ。〈豊琴の枢機卿団〉が実験と、その裏にある理由をつきとめたわ。〈枢機卿団〉は、驚いて、それを恐れたのね。〈長〉の魔力、魔法の品物、それに名前までも奪ってしまった。〈長〉の歌や物語は〈フォーゴトン・ルルム〉のあらゆる記憶から消しされたわ。まるで、その男が最初っから、いなかったようにね。そして、〈枢機卿団〉は彼を次元のはざまの小世界に閉じこめ、二度と脱出できないようにした。そうやって、『名なき詩人』を完全に消滅できたと考えたのね。

けれど、強力な魔法使いや魔物からなるグループが、この名なき詩人の実験を一部再現したのよ。そいつらは名なき者が次元のはざまの牢獄にいることをつきとめて、彼の複製を作る協力をしよう、ともちかけた。そのかわりに、『人間』への『教育』に一部参加させろ、とね。名なき詩人は自分の実験に取りつかれていたから、そのグループの邪悪な意志を見抜けなかった。そして、もう一体、『人間』を作ることに応じたわ。

そいつらに作られたのが、あたしだった。あたしに真の生命を与えるには、真実と正義に仕えるものをいけにえにしなければいけなかった。悪魔フェイルスが、このドラゴンベイトを異世界からさらってきたわ。ドラゴンベイトはサウリアンよ。この世界なら聖騎士にあたるのよ。

でも、名なき詩人の助けもあって、ドラゴンベイトはその邪悪な連中の計画を妨害することができた。自分の魂の一部をあたしにくれて、ね。名なき者が自分の身を犠牲にしてドラゴンベイトとあたしを逃がしてくれた。

逃げた後、あたしは知らない場所で目を覚ましたわ。作り物の記憶と、あなたたちと同じようなシンボルをつけられてね。心配することはないわよ。あたしの〈呪縛〉は、もう解かれたから。今では、あたしは、完全にあたし自身なんだから。

シンボルを取るのに、あたしは〈呪縛〉の強制に打ち勝たなければならなかった。〈呪縛〉は、そのシンボルが現わす人や集団が、あなたたちを命令に従わせるためにつけたものよ。

〈呪縛〉を解くには、それを作った人間か集団を倒すしかないわ。あなたたちの腕には『たなごろに口』のモーンダー神のシンボルがあるわね。なら、協力できると思うけど。

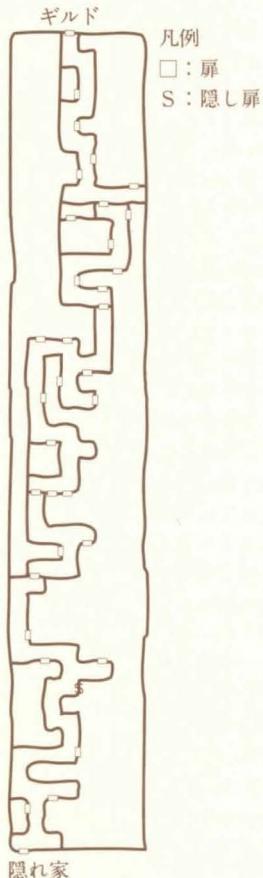


あたしが、ここに来たのは、モーンダー神がまた帰ってくるという噂を聞いたからよ。モーンダー神の信者は、あたしの〈呪縛〉にも関係していた。シンボルを持ったあなたたちがここにいるってことは、モーンダー神はこの世界に帰ってくるだけの力を蓄えたということになるわ。

モーンダー神の新しい祭壇はこの廃墟の神殿のどこかにあるわ。ここは、モーンダー神にとって、この世界での最初の聖地だったのよ。ドラゴンベイトとあたしに、手助けをさせて。あたしたちは、前にもこいつらとは戦ったことがあるわ」

記録4

下水道を記した地図があった。



記録5

「我々ラクシヤサは、賭けごとを好む。わたしは悪運に襲われ続け、財産をほとんど失ってしまった。だが、最近になってバーシェヤが、賭けでいかさまをやっていたことに気づいたのだ。だが、部族の王は確たる証拠なしには動かれん。バーシェヤは部族の倉庫を守っている。そこにこそ、いかさまの証拠を隠してあるのだ。押し入るのを手伝ってくれるなら、倉庫の中のものを好きに持つていっていい。わたしはバーシェヤのいかさまの証拠さえ手に入ればいいのだからな」

記録6

「手押し車に乗っている石像は、わたしの息子なんです。わたしたちはテシュウェーブの西でビホールダーに出くわしてしまいました。わたしたちは逃げ、隠れましたが、息子は間に合わなかつたのです。それからというもの、わたしは息子を治すためにお金を集め続けているのです。助けてもらえませんか？」

記録7

「我こそが、フゾール・チェンブリル、『暗黒の社』の最高司祭である。貴様のいう『大切な魔法使い』たちの力で、貴様の手先を追うことができたぞ。デクザム、貴様は自分の権限を逸脱した。こやつらには我が印がつけられている。時が来れば、我が功績は〈感知されざるもの〉の知るところとなる。

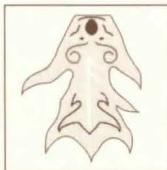
我こそが、主ペインに、より大きな栄光をもたらすために努めてきたのだ。主ペインが我らにお与えくださる力と、信仰によらぬ魔法との力とを組み合わせることで、〈フォーゴトン・レルム〉に、『ペインの霸權』がもたらされるのだ。これら、〈呪縛〉をつけた我が道具は、我が力を固めるいしづえとなるのだ。こやつらを使うことで、正義や善に属する魔法の品々にしかけられた罠を防ぎ、管理することができるであろう。〈呪縛〉を受けた者どもは、我が支配と権力のもとにある。我が生き続ける限り、こやつらの〈呪縛〉は消えぬ」



記録8



記録9



1. 炎のオーラをまとう
2. 他者の身体を乗っ取ることができる
ナル・オブ・レイディアンス
3. <輝きの池>に関与している

記録10

「フランに来てからというもの、俺は嘲笑われ、ののしられ続けてきた。だが、今こそ俺の天才を世に知らしめるときが来たのだ。地下には、核となる俺の軍隊がいる。川にはドラゴン海軍が控え、そして、空もじきにガーゴイルが制圧するだろう。しばらくは生かしておいてやる。俺が『炎のもの』を倒すのを見物しているがいい。その後で、お前たちは、俺にさらなる栄光をもたらすための、いけにえとなるのだ」

彼はきみたちを連れていきながら、狂ったように笑った。

記録11

「いいときにやってきたな。俺たちは、王がのこのこ飛びこんでくるのを待ってたんだがな。お前たちが攻撃したのが影武者だったとは、俺たちも思ってはいなかつたよ。こいつが、その、お前たちの殺そうとした男だよ」

彼は壁に縛りつけられた二人の囚人を指し示した。一人は、痩せた髭の男で、もう一人は若い娘で、ぼろぼろになった紫色の飾り布をついている。「お前たちが殺そうとしたのは、ギオジ・ワイバ

ーンスパー、大した物まね師だよ」

首領はギオジのほうを振り向いた。

「ここでまた一魔王の物まねをぶってくくれないかね」

ギオジはきみたちを見て、真っ青になった。

「そして、王の到着を可能にしてくれるお嬢さんも紹介しておこう。ナカシア姫だ」

その瞬間、王女はいましめをすりぬけ、小さな棍棒で首領の頭を殴りつけた。

「急いで！」 王女は叫んだ。

「首領があなたたちの〈呪縛〉の力を発動させないうちに、護衛たちを倒すのよ！」

記録12

老人は言った。

「わたしは賢者ディムスワートだ。きみたちに会えて嬉しいよ。こんな状況でなければもっとよかったですけどな。わたしはきみたちのような〈呪縛〉をつけた者をほかにも見たよ。しばらく研究したこともある。もう消えているシンボルもあるな。だが、そこにはもともと五つあったのではないか。」

わたしはきみたちのような〈呪縛〉をつけた者をほかにも見たよ。しばらく研究したこともある。もう消えているシンボルもあるな。だが、そこにはもともと五つあったのではないか。

本来、そのシンボルは魔力による署名なのだ。五つの強力な派閥がお互いに手を組んだ証のな。

言う必要もないことだが、やつらはすべてとてもなく邪悪だ。やつらは、全体の勢力を拡大するという共通の目的を持っている。だが、前のパターンそのままになるなら、モーンダー信徒とファイア・ナイフ団が関わっていることもあるし、それぞれ他の組織の妨害をしようとするだろう。それぞれの勢力はそれぞれにきみたちを利用しようとしているからな。そこにつけいる大きなすきがあるというのだ。

きみたちの〈呪縛〉の一つについては、わたしは個人的によく知ってるよ。手形と口のシンボルは、モーンダー神のものだ。以前にこの界に入ろうとしたとき、モーンダー神は破滅的なダメージを受けた。生き残った女最高司祭のモギオンが、きみたちにシンボルをつけ、それを利用してモーンダー神を呼び戻そうとしていることが、充分に考えられるよ。

他のシンボルについては、それが何でどのような噂があるかしか、わたしにはわからん。三角地に円、さらにその中にZがあるのは、くずヘンタリ



ム〉のシンボルだ。今のわたしたちの主人だな。
莫大な量の正義の武器や魔法の品物をどこかに隠してあると言っている。わたしはその場所をつきとめようとしてつかまつたのだ。隠し場所は〈ズヘンティル城塞〉にはないことは断言できるよ。〈ズヘンティルム〉の指導者、フゾール・チェンブリルは、善のアライメントの者を自分の意のままにし、それによってそういった品々を使おうとしているという噂だな。

半月と三本の棒の組み合わせは、ドラカンドロスのサインだ。強力な力を持つ、セイの赤魔術師の一人だ。だが、過ぎた野心を隠そうとも時を選ばうともしなかつたので追放された。ドラゴンにつかれていで、そこから名前がつけられたと言わっているよ。それと、ドラカンドロスのシンボルはシャドウデイルのエルミンスターに似ている。明らかにいつかエルミンスターのように強い力を得たいと思っておるのだろう。

最後に、炎の鉤爪は『炎のもの』ティランスラクサスのシンボルだ。フランでの一件以来、回復するのにはもっと時間がかかるとわたしは思っておったのだがな。やつはもつとも恐ろしい脅威だ。何しろその野望は主物質界全體の支配なのだ。そして、やつは〈輝きの池〉を支配しておる。やつが戻ってきた以上、〈プール〉もどこかに存在しておるだろ。

ティランスラクサスを完全に打ち倒すには、きみたちは魔法の品を三つ集めなければならぬ。きみたちに〈呪縛〉をかけた連中が、その品々をばらばらに持っているはずだ。ラサンダーの魔除けはこの〈ズヘンティル城塞〉のどこかにある。ドラカンドロスがドラゴンの兜を持っている。ハップの村にあるだろ。そして、ユーラッシュに行けば、モギオンがモーンダーの籠手を持っている。これらの品々は、どれも〈輝きの池〉の近くでなければ役に立たぬ。悪いが、わたしはこれらの品々の魔力がどのようなものかは知らないのだ。

戦力という意味ではわたしは役に立たないだろ。だが、以前にも冒險をした経験はあるし、きみたちの邪魔にならないようにしていることはできるよ」

記録13

「テシュ川を荒らしているドラゴンどもに対抗す

るには、〈ミュールマスター・ピホールダー師団〉の招請が必要と思われる。師団の破壊力を鑑み、テシュウェーブとダガーフォールに展開している〈ズヘンティルム〉友軍には退却を命ずる。この命令を無視した場合、その戦死者の寡婦や遺児には、いかなる賠償金も支払われない」

記録14

名前を持たない男は光を放ち、姿を変え始めた。彼の顔は抜け目がない、邪悪なものになった。「名なき者は、汝らのごとく余に逆らった」男の姿は言った。

「今では、この男の身体は、わたしの炎の入れ物に過ぎん。さあ、覚悟を決めろ。新しい主人に跪け、このティランスラクサスに！」

彼が笑い声をあげると同時に、きみたちの腕の〈呪縛〉が激しく光った。きみたちは自分たちが彼の前に跪き、頭を下げるのを感じた。

記録15

「偉大なるものどもよ、かの者たちがエルミンスターの計略に加担していることをおわかりになられたでしょう。エルミンスターは、〈群竜の飛翔〉への報復としてすべてのドラゴン属を倒すつもりですぞ。かの刺客どもは、我が忠誠の証として、差し上げましょう。わたしがあなたがたに警告を行なったことをお忘れくださいな。かの者どもの腕には『ドラゴンを隸従せし』ティランスラクサスのシンボルがあるのがおわかりでしょう。このシンボルにより、かの者どもはティランスラクサスの従僕となっております。そして、同時にエルミンスターの駒の一つでもあるのです！」

だが、ドラゴンのうちの一頭が答えた。
「それでは納得できぬ。これらの定命の者には〈呪縛〉が光っておるではないか。同じような〈呪縛〉を用い、将竜ミスティーネラドナクレスをある戦士に襲わせた話を聞いたことがある。我には、汝が〈呪縛〉を用いてこれら定命の者を操っているように見えたのだがな。この者どもを解放するがよい。その上で、この者どもの行動を審判しよう」

ドラカンドロスは言った。

「しかし、もし、解放すれば、かの者たちはあなたがたを襲いますぞ！」

ドラゴンは答える。



「我らの数に比べ、この者どもはごくわずかではないか。我らにはこの者どもを恐れる理由はない。それとも、汝にこの者どもを恐れる理由があるのか？ そのようなことはあるまいな。もし、汝の言葉が嘘であるなら、汝は我らを恐れねばならぬぞ！」

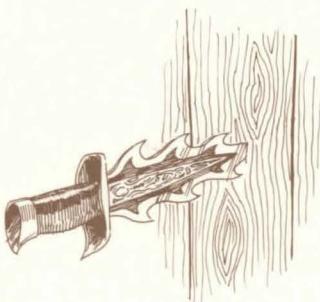
その言葉と同時に、ドラゴンの邪悪な牙の間から、煙を吹きながら酸が一滴したたった。

ドラカンドロスは後ずさり、きみたちのほうを振り向いた。意味のわからない言葉が彼の口から紡ぎ出され、きみたちの腕からシンボルが消えていく。きみたちはまた一つ、〈呪縛〉から解放された。

記録16

「洞穴の奥深くの魔物どもが目を覚まし始めている。そのものどもは、わたしに従い、偉大な魔法の品を贈ってくれた。『炎のもの』を、完全に殺すのに必要な三つの品のうちの一つだ。やつは、フランでわたしを裏切った。今こそ、復讐を果たすことができる。〈ズヘンタリム〉を始末ししたい、ミス・ドラノールに、わたしの仇敵に注意を向けることができる」

記録17



記録18

「お前さんたちのつけている〈呪縛〉——その三日月のものじゃ——は、エルミンスターの紋章にとてもよく似ておるな。エルミンスターは、誰かが『私はエルミンスターに〈呪縛〉を受けました』といわんばかりにしていることを好みはせんぢやろう。じやから、もし、わしなら、すぐにシャド

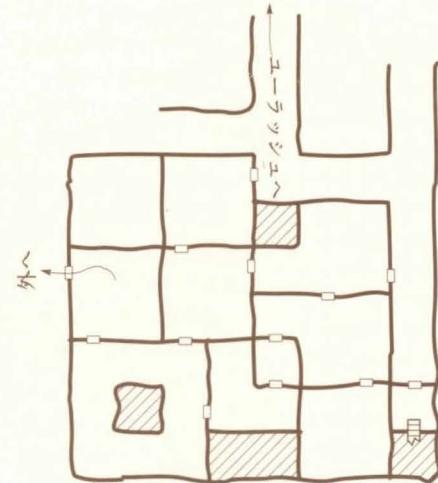
ウデイルを出て、船でアシャベンフォードに行くじやろうな。それから南に向かって、ある赤魔術師の塔を捜すよ。そして、そいつに〈呪縛〉を消させるじやろうて。まあ、エルミンスターにイモリに変えられたいというのなら、このへんをいつまでもぶらついていてもかまわんがな」

記録19

司祭が呪文を唱えると、〈呪縛〉が激しく光り始めた。青い炎が〈呪縛〉からほとばしり、部屋を照らす。キャラクターは激しい苦痛に襲われ、のたうち回った。僧侶は呪文を中止した。

「〈呪縛〉はわたしの魔力に反発しているようです。もうしわけないが、わたしの力では、解除することはできません。幸運を祈っていますよ。さようなら、ゴンドの導きのあらんことを」

記録20



凡例：

□ 屏



壁



階段

記録21

アラテリアンへ

おい、おまえは俺ん兄きかもしけんが、貸しちよる300gpを返さんかったら、バスターード・ソード持って、追いかけていっちゃんるけんの。おまえが



『暗黒のネットワーク』のメンバー ゆうても関係ない。いつも、組織に面倒見てもらえるわけでもないやろ。おまえみたいなスライムかぶったオチュークに使う手立てはいくつかある。

それはおいとこう。父ちゃんも母ちゃんも元気や。妹はズボンが合わんぐらい大きゅうなった。俺は、ブラック・ドラゴンが集まっちょるゆう噂、確かにハップン村に行くかもしねん。

エッセンブルにはいつ戻ってくる？ リリアン
アキラ 義姉が、気にしちよった。

もし、金が払えんゆうんやったら、義姉をもうけん。

親愛なる弟、ミリクセレツツ

記録22

『モーンダーの穴』に入ろうなどとは、狂ったとしか思えんな。理由はわからんが、この街を自由に歩く許可は与えよう。『赤い羽根飾り』の兵は、きみたちの邪魔をせぬよ。これは保証しよう。だが、この街は攻められている最中で、きみたちをべったりと護衛することはできん。『ズヘンティル城塞国』の『テラー・チーム』がいくつか、ここに送りこまれたという報告がある。それから、東にはシャンブリング・マウンドも見かけられたらしい。

ここに『穴』への地図と、我々の見張り所の位置を記した地図がある（冒険記録の52番を見る）。きみたちは自由に兵舎で休み、食堂で食事をしていってくれたまえ。地図を見れば、兵舎や食堂の場所もわかるだろう。あっと、一つ気をつけたほうがいい。ユーラッシュの壁や舗道は、最近ひどくダメージを受けているからな。あっちこっち、崩れやすくなっているよ」

記録23

「大もうけのチャンスやで。有罪ち決まった囚人は、武器なしでモンスターと戦う。囚人に賭けて、勝ったら三倍配当、モンスターが勝ったら賭け金はそのまんまや。訴えられて、無罪やて言い張つちよる被告人は自分の武器で戦う。主ベインが価値ありって認めた連中なら勝ち残るやろ。その戦いじや、どっちが勝っても二倍配当や。どっちに賭けるか訊くよって、好きなほうに賭けたらええ。賭け金は1 pp や」

記録24

手紙には次のように書いてあった。

『豊琴師』の友よ。セイのドラカンドロスが、きみをドラゴン属に対して使おうとしていることを警告しよう。きみ自身を守るために、ドラカンドロスが塔地下の洞穴のどこかに隠した、凄まじい威力の剣を捜したほうがいい。それでも、可能ならばドラゴンを避けるように。まったくもって危険なのだから」

手紙には署名はない。

記録25

「わたしたち、ミス・ドラノールの靈は、何世紀もの時の流れのために、力を失ってしまいました。今のわたしたちには、ほとんど見守ることしかできません。あなたがたの手を貸してください。お礼に、スリ・クリーンの秘密の力のことを教えてあげましょう。この建物の中に赤く輝いている網があります。『クリリクリク』と唱えて、中に入りなさい。そうすれば、大きな力を得られるでしょう。わたしは、スリ・クリーンたちが何度もそうするのを見たことがあります」

記録26

「俺たちは、僧侶の魔法で麻痺させられたんだ。やつは、南の首領の部屋に連れていかれた囚人たちを追って来たんだ。この部屋で、なんとか仲間はやつを捕まえることができたんだ。運がよかつたよ」

記録27

怪我をした男たちは、みな恐怖に呻いていた。彼らを怯えさせたのは、ハンマーを持った狂人と、突然部屋を覆った光る刃の壁らしい。怪我人たちは、二人の囚人が役に立つよう、首領に祈っている。

記録28

テシュ川を利用してダガーフォールに入ろうとした、『ズヘンタリム』の兵士たちは、波の下で生き続けていたドラゴンに呑みこまれた。『ズヘンティル城塞国』に裏切られた、フランの誰かがこのドラゴンを目覚めさせたらしい。そいつは、まだダガーフォールの近くにいるはずだ。ドラゴンの



攻撃はつい最近のことだったからな。

記録29

燃え残った部分にはつぎのように書いてあった。
「……我々の同盟者は炎を操ることができる。身体を次々に変えることができる。次元を超える魔力の通り道を作ることができる。『炎のもの』は、あいつだ。間違いない。ティラン……」

記録30

「では、こいつらがフゾールの、つまらぬ秘密というわけだな。非常におもしろい。主ベインの『真の』司祭としては、お前たちをミュールマスターの偉大なる〈感知されざるもの〉のところに送らねばなるまい。

ミュールマスターに着いたら、それらの〈呪縛〉を吾輩の実験室で調べよう。お前たちには非常に苦痛だろうがな。だが、試験が終われば楽になるはずだ。お前たちは死ぬだろうからな。苦痛は二週間、長くとも三週間とはかかるまい。

〈呪縛〉の秘密を解き明かせば、〈感知されざるもの〉は、あの小さきフゾールのことを大変お怒りになられるだろう。そして、あの背教者とその大切にしている魔法使いどもを排除できるというわけだ」

記録31

「あなたがたは、赤いロープを着た人たちに運びこまれたんですよ。そのかたたちの言うことには、街道で死にかけているのを見つけたとか。そのかたたちが、前金を払ってくださいましたから、ご自由に泊まっていてください。その刺青は、あなたがたが運びこまれたときからありましたよ、そういうのを見るのははじめてですわ。賢者フィラニなら何か知っているかもしれません。尋ねてみたらいかがです。ここから二区画北ですよ」

記録32

警備兵二人に、その上官がきみたちを乱暴に尋問した。きみたちが「はい」と答えると、兵士の一人が「そうだろう」とでも言いたげに冷たく笑って、書類に記入した。「いいえ」と答えると、もう一人が鼻をならして別の書類に記入する。上官はきみたちの身体的な特徴や出身地、名前をすべ

て書き留めた。きみたちは、ときおり、質問の意味を尋ねてみたが、そのたびに返ってきたのは冷笑と、上官の「お前たちの記録を作るのだ。形式的なものだよ」という答えだけだった。

記録33

「わたしの名は、シーミア。わたしの祖先はここミス・ドラノールで生まれ、死んだ。最近、わたしは祖父の墓が忌まわしい蜘蛛どもの巣とされている悪夢に襲われた。もし、祖父の靈をなぐさめてくれる手助けをしてくれるなら、祖父の作ったこの弓を差し上げよう」

男は、精巧に作られた弓を見せた。弓は、強い魔力を放っている。

記録34

「ああ、そうですね。あたりに気をつけたほうが多いですよ。見えない穴がたくさんありますし、壁が崩れやすいですから、頭を打ったりするかも。〈赤い羽根飾り〉は、あっちこっちにうろうろしています——で、街荒らしを見つけて殺すように命令されているんです。『穴』がどこにあるか知りたい？ 狂ってるぜ。あ、いえ、街の北西です。北の壁にありますよ。でも、入ったら本当に気が狂ってしまいますよ。〈赤い羽根飾り〉の中には、あそこを警備するぐらいならって、トンズラこいたやつもいますぜ。ああ、そうでしたね。〈赤い羽根飾り〉は、街じゅうに見張り所を作りますよ。『穴』のまん前にもありますし、司令官のいる本部もあります。もう、行ってもいいですかい？」

記録35

手紙には次のように書いてあった。
「友よ、きみにしらせがある。きみの〈呪縛〉の中で、もっとも強力なものを持っている、呪われし『炎のもの』を倒すには、3つの品が必要だ。『ドラゴンの兜』、『モーンダーの籠手』、『ラサンダーの魔除け』だ。それぞれは、きみの〈呪縛〉を支配しているものが所持している。これらの品がなければ、きみの最大の攻撃をもってしても、『炎のもの』は倒せないであろう」

手紙には署名はない。



記録36

「俺たちや、ほとんど1カ月ほども、こんバグベアやワーグどもを引っ張って来たんや。お前ら、楽な役回りができるぜ。俺たちや、こん怪物どもをダガーフォールに連れてくわけにやいかん。そげんことすりや、〈ズヘンタリム〉のしわざやて、ばれてしまうけんの。じゃから、お前らが、こん獣どもをダガーフォールに連れてって、襲え。そんあとから、俺たちズヘンティルの兵士が『救援軍』として乗りこんでいっち、お前らを追っ払う。そうすりや、俺たちや、街を救った英雄や。手厚くもてなしてくれよるやろ。じゃ、俺たちや、先にダガーフォールに向かう。がんばっちくれや」

記録37

「この地下道は、神殿の者の葬式のさいに使われていたものです。この地下道を使って遺体を墓所まで運んでいたのです。神殿の裏口に通じています。

もし、北の道や東の廃墟を通って近づいたりすれば、ティランスラクサスの手先はあなたがたを見つけ、ティランスラクサスは準備を整えてしまうでしょう。この地下道のことは、ティランスラクサスは知りません」

記録38

「あなたがたは五つの組織のシンボルを身につけてますね。三つは、わたしも知っていますが、一つは全然見たことがありません。最後の一つについては、思い当たることが一つだけあります。〈炎の短剣〉のシンボルは〈ファイア・ナイフ団〉のものです。暗殺者の集団で、もっとも最近ではウェストゲートの近くで活動してましたよ。でも、そこで壊滅したはずですから、新しい基地を見つけたのでしょう。残念ながら、それがどこかまではわかりません。

〈たなごころに口〉というのは、モーンダー神のシンボルです。この神は世界から追放されました。汚物の塊の形でふたたび信仰を集めています。追放される前は、ユーラッシュの街の一画に汚物を残していました。教団は緑を神聖なる色としています。

三角形の中にZの文字があるのは、〈暗黒のネットワーク〉、〈ズヘンタリム〉のシンボルです。〈ズ

ヘンティル城塞国〉で暗躍している、僧侶、魔法使い、盗賊からなる邪悪な同盟です。〈ズヘンティル城塞国〉を操っているという者もいますよ。

〈炎〉のシンボルはわたしは見たことがあります。ですから、何も言えません。最後のシンボル、〈三日月〉はシャドウディルにいる強力な力を持つ賢者のものに似ているような気がします。わたし自身の安全のために、これ以上のことは言えませんけど」

記録39



記録40

〈ズヘンタリム〉軍隊のテシュ川への侵入ゆえ、すべての同盟者は滝の下にある洞穴に集まるよう命ずる。ドラゴンはビホールダーを支えられるだろうが、〈ズヘンタリム〉兵が援護することが考えられる。報酬として、我々がテシュウェーブ、ヴァーンラー、〈ズヘンティル城塞国〉を落としたときに、その戦利品を配分しよう。計画はほとんど完成している。すぐに来られたし。

ポルフィリス・カドルナ卿

記録41

紙は泥で汚れてしまっているが、かろうじて次の部分だけ読み取れた。

「ナイフどもは信用できない。信者どもは頼りにならない。魔術師は狂っている。『T』は危険だ。〈新しき同盟〉には、ほとんど信頼ができない。ことに、〈呪縛〉をかけた連中の扱いについては、



まったくといっていいほどだ。我々自身でも偵察部隊を送る必要があろう。目を……」

記録42

手紙にはつぎのように書いてある。
「〈豎琴師〉の友よ、我々はきみに仲間を提供する。〈ズヘンティル城塞国〉には少し変わった豎琴の使い手を、ハップの村では魔法使いアーカバー・ベル・アーカッシュがドラカンドロスに対抗している。最後に、『穴』には、きみを助けるべく、すぐれた二人の戦士を向かわせた」

手紙に署名はない

記録43

フランより、厳正なる裁きから一人の男が逃げた。〈評議会〉の裏切者、カドルナが死から蘇り、ダガーフォールに流れついた。

記録44

「わたしたちは、スワンメイと呼ばれる冒険者グループです。〈大氷河〉にキスとペリンダが消えて以来、わたしがリーダーを務めています。わたしたちは赤魔術師の塔に忍びこんでくれる人を必要としています。そして、ドラカンドロスは紋章を持っている一行を捜していると聞きました。そのあなたがたの腕にあるものを。」ブラック・ドラゴン

ドラカンドロスはこのあたりの黒竜を残らず塔に集めています。わたしたちは、ブラック・ドラゴンのある部分を欲しいのです。わたしたちの印を受けるなら、わたしたちに与えられる報酬をあなたがたにも分けましょう。それに、この洞窟を守っている中には、わたしのよく知っている一族もいますから、安全に塔に着くことができます。塔に着いたなら、ドラゴンの心臓を取ってきてくださるとありがたいのです。それが無理ならば、ドラゴンを塔から追いだすだけでもかまいません」

記録45

ケンタウロスたちは、スリ・クリーンと蜘蛛と戦ったばかりだった。そのモンスターどもは、宝探しで北へ——おそらく、ミス・ドラノールへ——向かっていたのだと思われるということだ。スリ・クリーンは矢をかわす力を持ち、フェイズ・スパイダーはその攻撃が終わった後では、手が出

せないということだ。

記録46

尊敬すべきモーンダー神の使徒モギオンへ
赤魔術師ドラカンドロスが、我に魔法のメッセージを送ってよこした。汝は我々の実験材料を失おうとしておる、とな。汝が、追放されし神の使徒の、いや、のみならず、前回の同盟からの生存者であることはわかってる。それを踏まえた上でも、なお、汝が我々の実験材料を殺してしまおうとしていることには、強く抗議せざるをえない。

もし、汝が狂った計画を実行し、我々のモルモットを殺すならば、ドラカンドロス、我自身、そして、帝王Tは、汝を狩りだし、また、汝と汝がこの界に呼び寄せようとしているものを殺すであろう。我々にそれができぬとは思わぬことだ。
〈フォーゴトン・レルム〉のこの地で、現在はたらいているだけが、我々の力のすべてでないことを忘れるな。汝が敵対的な行動を取るなら、それに応じたことをしてみせようぞ。実験材料のテストが完全に終わった後なら、それを殺すのに異存はない。

追伸：汝より依頼された調査を行なったが、汝の考えは誤りゴントレットであった。ただの籠手ブル・オブ・レイディアンスであり、〈輝きの池〉を喰う力を持っているとはいえ、モーンダー神自身の顯われではなかったのだ。これで、汝が「古カビ」をこの界に呼び戻せる望みはさらに弱まったといえよう。

暗黒より敬意をこめて

ズヘンティル城塞国、ペイン神の使徒フゾール・チエンプリル卿

記録47

ダガーフォールの街の近くには、街の名のゆえんとなった、滝がある。その裏に、深い洞穴が隠されている。最近までは、廃棄されていた。だが、死から蘇った男が現在、そこで活動をしている。そのために、暗黒のものが目覚めようとしている。

記録48

「よくやった。余のペットどもよ。余を傷つけるおそれのある三つの品は余のものとなった。さらに、汝らのまとうく呪縛ブル・オブ・レイディアンスは〈輝きの池〉と同じはたらきをする。それをもって、余は汝らの好き



な者の身体に入り、必要な限り使うことができる。そして、たとえ身体が殺されても、余は〈呪縛〉を通じて〈プール〉に戻ることができるのだ。あるいは、汝らのうちのほかの者の身体にもな。汝らがもたらしてくれた、大いなる自由については感謝せねばなるまい。さあ、ついてこい。これから、その危険な品々を破壊するのだ」

記録49

暗黒の道ゆき：四人のダーク・エルフは、きみたちを連れて長い傾斜路を下っていった。何時間も過ぎ、何キロも下った後、巨大な黒い茸の森と、奇妙な形の建物のある場所に行き着いた。

最後に、きみたちは光る洞穴に着いた。その中央には大きな神殿がある。ダーク・エルフはきみたちを神殿の中心へと連れていく。黒めのうの壁の部屋には、まばゆい銀色の網が張られていた。網の中には巨大な黒い蜘蛛がいる。蜘蛛は、きしむような、うつろな声をあげた。

「ようこそ。わらはは、ダーク・エルフの神の使いじゃ。お前たちはわらはの虜じや。選択は簡単じゃ。奴隸となるか、食事となるかじや」

きみたちが後退しようとしたとき、巨大な石が入口を塞いだ。クックッと笑う声が部屋にこだました。

記録50

ハーフリングは言った。

「そうだね、あたいたちはおたがい立派な冒險者じゃないか。あたいの名前はオリーブ・ラスケトル、あんたたちの腕の刺青について、ちょっとは知ってるんだ。あたいの友だちが、ちょっと前まで同じような模様をつけてたよ。あの娘、今どこにいるんだろうかね……」

よく聞きな。あんたたちは、『ラサンダーの魔除け』を手に入れないといけないよ。あんたたちを助けられる人がいるんだけど、捕まっちゃって、今、神殿の中に閉じこめられてんだ。賢者ディムスワートって人で、さつき話したあたいの友だちも助けてくれたんだ。あたいは、神殿の中に入る秘密の抜け穴を知ってる。どうだい？」

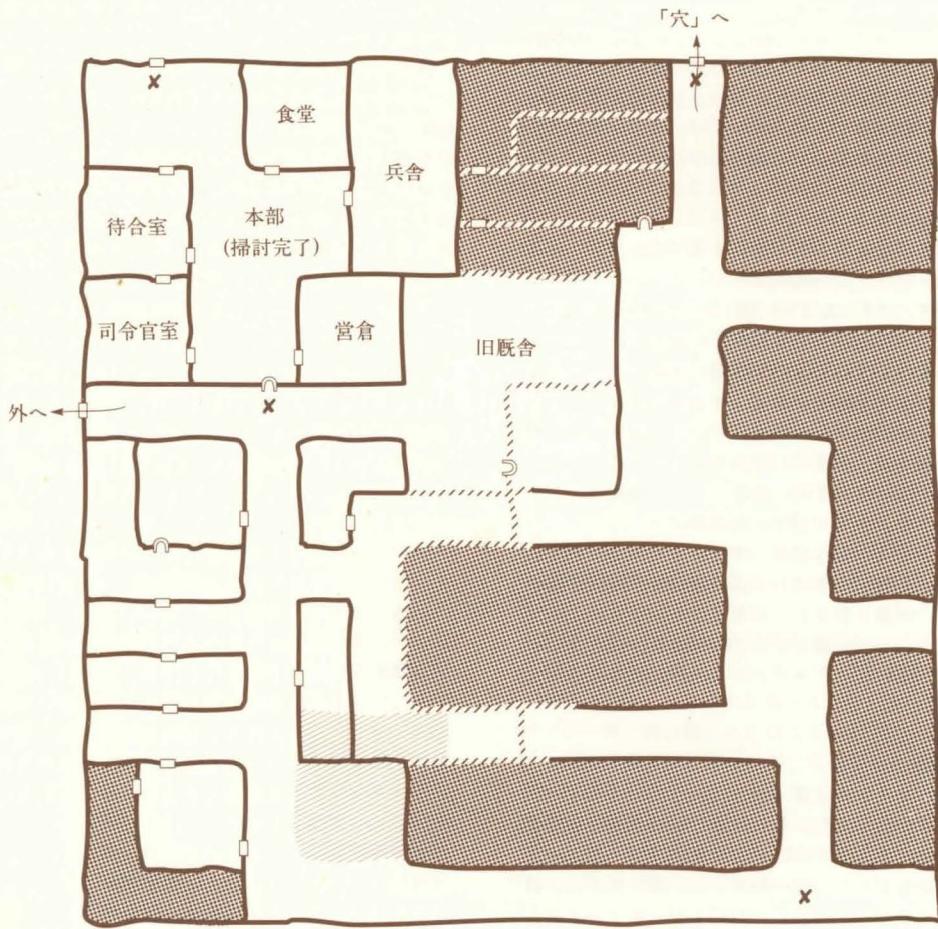
記録51

「あんたたちが、会わなきやいけないのは、賢者ディムスワートって人さ。その人はとってもすごい賢者で、音楽好きなんだ。だから、あたいと気が合うんだ。あたいが、吟遊詩人だって、あんたたち、知ってたかい？ ほら、ちゃんと豊琴持ってきてるだろ。歌ってあげてもいいよ——と、今はやめといたほうがいいね。フゾール・チェンブリルは、ほかの〈呪縛〉について知るためにディムスワートを捕まえたのさ。

あたいは、あんたたちを牢獄までは案内できるけど、ディムスワートを外に連れ出すには、あんたたちに助けてもらわなくちゃ。あたいは、あたいなりに、逃げられる。あたいはペインの司祭に全然見られないように行けるんだ。でも、あたいの知ってる抜け道は、あたいぐらいにすり抜けるのが得意なやつじゃないと、使えないだろうね」



記録52



凡例：



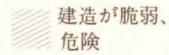
X 見張り所



未調査



倒壊



建造が脆弱、
危険

記録53

突然、屋根が蒸気と化し、アゾウン王、お抱え魔術師のヴァンジャーダハスト、それに近衛兵团が飛び降りてきた。近衛兵の一人がきみたちを指差し、言った。

「陛下。あの者どもが陛下を殺そうとしたのです」
王女がさっと立ち上がり、きみたちと父親の間

に割りこんだ。

「この人たちはファイア・ナイフ団に操られていたのです。この人たちにはどうしようもなかったのです。それに、わたしを助けてくれました」

王はきみたちと王女とを見た。

「よかろう。だが、汝らが余を殺そうとした事実は消えぬ。それに、汝らは支配を受ける〈呪縛〉を



ほかにもされているようだ。余はなんじらを死刑にはせぬ。だが、全コアミアからの追放刑に処す」

近衛兵がやってきて、きみたちを外に連れだそうとしたそのとき、向こうの扉が開き、〈ゴンド神の使徒〉ジャーリーがふらふらと部屋に入ってきた。部屋を去りながら、きみたちの目には王女がジャーリーに駆け寄り、二人が抱き合う様子が見えた。隠れ家から出るとき、王が言うのが聞こえた。

「ナカシア、王女としての務めに戻るのだぞ」そして、声は消えていった。

きみたちは郊外に連れていかれ、近衛兵はそこできみたちを釈放した。きみたちがどこへ向かうか考えていると、扉をバタンと開いて馬が飛び出てきた。その背には、ナカシアとジャーリーが乗っている。北へ馬を走らせながら、ナカシアはきみたちに手を振った。

記録54

首領がようやくわずかに意識を取り戻しかけた。王女は首領に話しかけた。喉元に短剣を突きつけられ、首領は悲鳴をあげた。

「わ、わかった。彼らを解放する」

首領は、何か意味のわからない言葉を言い、きみたちの〈呪縛〉は消えていった。

記録55

「きみたちが、ティルヴァートンで仲間を助けてくれたことを感謝するよ。そのお礼に、いくつかの注意をしてあげよう。〈ファイア・ナイフ団〉が森の道を見回り、きみたちをさがしているよ。それから、ミス・ドラノールの廃墟にいる『炎のもの』が、きみたちのことを気にしているようだ。最後に、なにか知らぬが不気味なものがスタンディング・ストーンにいる。では、気をつけてがんばりたまえ」

記録56

男は言った。

「わたしの名前は訊かないでほしい。名前というものは、理解できぬ者に、人が与えるラベルに過ぎないものだ。わたしは、きみたちの〈呪縛〉のこととも、きみたちが自由を得るための苦難のこととも

知っている。わたしは、かつて、きみたちのものと同じような〈呪縛〉が最初に作られたとき、その一端を担っていたからね。

きみたちは最後の呪縛、『炎のもの』ティランスラクサスのものは、もっとも危険だ。きみたちは気づいていないかもしれないが、今、きみたちはティランスラクサスへの永遠の隸従に近づいているのだ。他の同盟者を押さえるために自分の力を裂かずにはすむようになってしまった。そのためには、いまや、きみたちが決して逃げられぬよう、全力を投ずることができるのだ。

不意をつき、〈呪縛〉の力を発動される前に、『炎のもの』を倒さねばならない。きみたちは、ほかにすべはないのだ」

記録57

「肝のすわった者と語り合るのは楽しいものだ。我々の部族は、しばらくの定命の期間をここで過ごすことにしており。だが、『炎のもの』ティランスラクサスは我々の従者を奪い、我々の部族を脅威にさらしている。やつの力は強く、その神殿を直接攻撃することはできぬ。

では、話を進めよう。お前たちは『炎のもの』の紋章を身につけているな。だが、お前たちがやつの敵であることは聞かされている。お前たちが神殿を襲撃するときには、我々は従者を取り戻すべく力を結集しよう。そのことにより、やつの力は弱まり、お前たちは勝つことができるかもしれませんぬ」

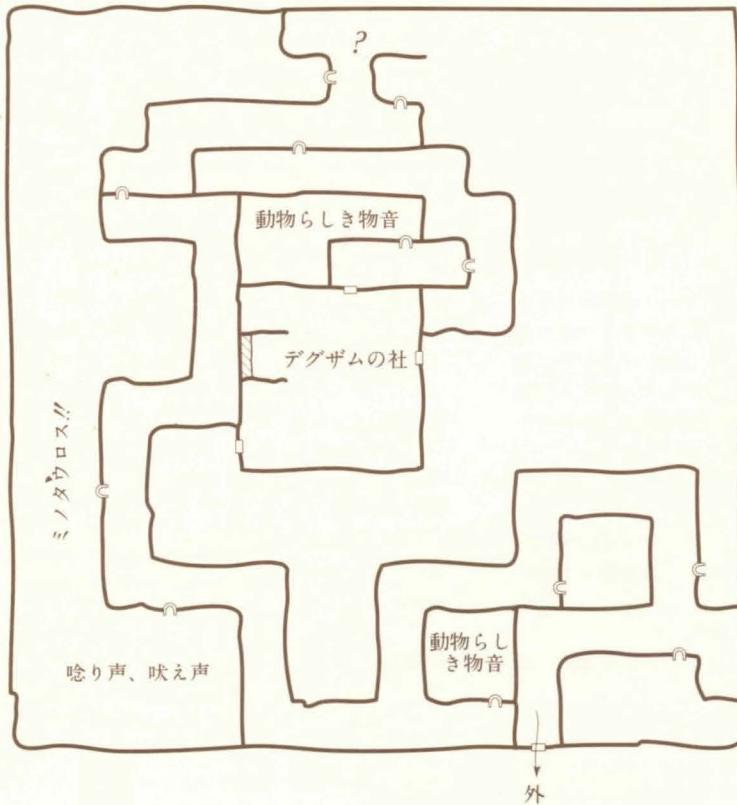
記録58

手紙はずいぶんと読みにくい字で書かれている。「我が所要にはディスプレーサー・ビーストでは脆弱に過ぎるとみなした。貴公はティルヴァートン近くの山中で訓練を続けるよう指示する。〈ティルランド〉に荒廃をもたらすには、ディスプレーサー・ビーストをいくら投入しても不足であろう。かといって、ドラゴンが〈飛翔〉を開始したときに無為に殺すこともない。定期的に連絡、指示を送る」

手紙には署名と一緒に紋章が書かれていた。それは、三日月をかたどったもので、〈呪縛〉のものと同じだ。



記録59



凡例：

□ 屏

○ アーチ

祭壇

酒場の噂

ここには、冒険者たちが旅の途中やほかの人間たちと会ったときに耳にすることをおさめてあります。ゲームの途中、この冒険者ジャーナルの番号を指示されることがあるでしょう。「酒場の噂X番を見ること」というふうに指示されたときは、その番号を参照し、四角にチェックを入れてください。指示されていない番号を先に見てはなりません。中には偽のものもありますし、ちゃんとした時、場所で読むべき大事な情報もあります。

酒場の噂1

姫様も王様も変装してこの街にいるんですよ。

酒場の噂2

炎をまとった巨人が〈エルフ聖地〉を歩いている。そいつは、三つの古代の工芸品だけを恐れているそうだ。一つは、この北の滝の下に眠っているかもしれない。

酒場の噂3

「穴」を怖がっているやつは多いよな。その守りにいかずに、逃げちまったやつもいるぜ。



酒場の噂4

この街の下水道は、〈デイルランド〉でもとびきり危ない場所ですよ。

酒場の噂5

赤ロープの暗殺者どもが、森の道を見回っているとさ。

酒場の噂6

アーカバーという名の冒険商人がハップを調べに南に行きおった。女ばかりの冒険パーティーも同じ方向に行つたな。

酒場の噂7

テシュウェーブが〈ズヘンタリム〉の手に落ちたもんで、川は危なくて旅ができないよ。

酒場の噂8

姫様はいつも何か紫色のものを身につけているんです。それが目印になりますよ。

酒場の噂9

確実にシャンブルを殺せる何かを持ってるってやつが、この前ここに来たよ。棒杖（ワンド）みたいなものを振り回していたけどな。

酒場の噂10

祭壇にや、落とし戸があつて、そこに魔法ん品物が置いぢよる。兵隊たちがぶんどってきたやつや。

酒場の噂11

つい最近のことだけどな。南から来た傭兵团が河賊に全滅させられたよ。

酒場の噂12

戦争も起ころうとしているのに、川は危なくて旅ができなくなってきた。テシュ川の近くじや、ドラゴンやビホールダーがいるのが見えたってよ。

酒場の噂13

〈ズヘンティル城塞国〉の〈テラー・チーム〉がここに来てるっていうじやねえか。

酒場の噂14

シャドウディルのエルミンスターが、変装してここに立ち寄ったよ。その後、テシュウェーブを行つたと思う。川のドラゴンを調べていたんじやないかな。

酒場の噂15

シャンブルのやつは、相手をひきずりこんで窒息させちまう。いそいで、バラバラに切り刻まないとだめだな。

酒場の噂16

ペイン神はビホールダーがお気に入りや。ビホールダーにや近づかねえほうがええ。離れとくこつた。一度に四匹も出会つたら、そりや、〈ミュルマスター・ビホールダー師団〉の先発隊や。逃げなきや、生命ないぜ！

酒場の噂17

このあたりじや、木や草が歩きたがって困るぜ。中でも、シャンブリング・マウンドが一番危ないな。

酒場の噂18

海賊どもがまた〈月海〉を荒らし始めた。船旅は危なくなってきたよ。

酒場の噂19

ここは、〈ズヘンティル城塞国〉の軍隊に侵略されてな。このあたりの街道はみんな、厳しくパトロールされとるよ。

酒場の噂20

建物が崩れたり、足もとにいきなり穴が開いたりするから、街は気をつけて歩けよ。

酒場の噂21

北や西から魔物がやってきて、〈谷〉を荒らしてるんだ。

酒場の噂22

〈ズヘンタリム〉の魔法使いは、自分とおんなじぐらい頭ん切れるやつじやねえと、まともにとり



あわねえ。

酒場の噂23

〈ズヘンティル城塞国〉は、この〈短剣の谷〉をやたら欲しがっている。ここが、〈フォーゴトン・レルム〉でも、とりわけ豊かな土地だからな。

酒場の噂24

ドラゴンが空を飛ぶのが見えたよ。テシュ川の滝のあたりにもうろついてるらしいね。

酒場の噂25

市役所の事務員はティランスラクサスが倒されてから、なんとなくがっかりしているようだぜ。冒険者に与える使命がなくなっちゃったからな。

酒場の噂26

こことこ、ドラゴンが南に飛ぶのを見るんだよな。ずっと、南のほうに向かってるならいいんだが。

酒場の噂27

モーンダー神は、むかし、ここの南にのたくっていったことがあるんだ。草が枯れてできた「モーンダー・ロード」って跡が残ってるよ。

酒場の噂28

シャドウディルに向かう船が、二隻行方不明になったよ。川はどんどん危険になっているみたいだな。

酒場の噂29

紫んベスト着た盗賊が、金持ん家を襲ってるやとよ。ハンマー持った坊主が逃げるんを手伝ったそうや。

酒場の噂30

ミス・ドラノールの騎士たちは、相手を誘惑して、進んで死んでしまうようにしむけてしまう魔物を恐れているそうだ。

酒場の噂31

ハーフリングなんてみんな盗賊さ。

酒場の噂32

ダーク・エルフどもが、この街を通っていきおった。やつらの装備は魔力を発散していたな。

酒場の噂33

〈ズヘンティル城塞国〉は、傭兵を雇っている、というか、派閥ごとに兵隊を欲しがってるんだな。フランからやってきた元評議会員と問題も起こしたらしいね。

酒場の噂34

緑のロープを着た狂人どもが、街の郊外をうろついているよ。特に、南に多いな。

酒場の噂35

〈ズヘンタリム〉の軍隊がテシュウェーブに集っているよ。シャドウディルかダガーフォールに侵攻するつもりなんだろ。

酒場の噂36

南の森には、友好的なケンタウロスの村があるよ。

酒場の噂37

コアミアのアゾウン王は、ティルヴァアートンで自分の娘を捜しています。わたしに言わせれば、姫様はわがままなんですよ。

酒場の噂38

賢者デイムスワートが〈ズヘンタリム〉に入ったとよ。まさか、と思ったけどよ。

酒場の噂39

フゾール様は特別訓練の〈恐怖小隊〉をユーラッシユに送ってるんやと。特別訓練する傭兵を搜しちょるって聞いた。

酒場の噂40

〈ズヘンティル城塞国〉が、西に広がろうとしているのはラッキーだよ。まあ、少なくともヒルズファーへの牽制にはなるな。



酒場の噂41

なんか、とんでもないでかい、骸骨みたいなやつが、南に巣を作ったって聞いたぜ。

酒場の噂42

〈ズヘンティル城塞国〉の兵士と揉めごとを起こしたくない、ちゅうなら、ほんとうにのろまに見せるこったね。

酒場の噂43

モーンダーが「穴」から出てからというもの、壁や床はほんとうに危なっかしくなってる場所があるぜ。

酒場の噂44

赤魔術師は炎の魔法を好んで使うというな。冷気の攻撃が役に立つんじゃないか。

酒場の噂45

モーンダー神の信者どもが、またこのあたりをうろつき始めたなあ。

酒場の噂46

〈エルフ聖地〉は騎士団が守っている。騎士団は、中にいるのが出てこないよう見張っているんだ。誰かが入ってこないようにしているんじゃないんだよ。

酒場の噂47

昆虫人のグループが、森に入ったのを見たってやつがいるよ。ミス・ドランノールに向かってたんだと。

酒場の噂48

ベインの神殿はビホールダーを雇って僧侶を訓練している。強敵を倒すときには、その化物の師団全体を使うこともある。

酒場の噂49

ヴーンラーは、また軍隊を建て直したそうだ。やつらの腐った士官どもに幸いあれ、だ。

酒場の噂50

頭んネジが一本はずれたハーフリングがこのあたり、うろついてるぜ。自分を吟遊詩人やと思ってやがる。そこそこ唄はうまいが、『さえずり』ザナニアとは比べものにやならねえな。

酒場の噂51

でっかい籠積んだ黒い船がミュールマスターから来ちよった。あそこは、ペイン神の総本山や。たぶん、こん街にや査察官が来ちよるぜ。

酒場の噂52

モーンダー神を「穴」から解放しようとしたのは、〈ズヘンティル城塞国〉の陰謀だったんだ。

酒場の噂53

ペイン神の僧侶にや、礼儀正しく、相手を立てとくこったな。そうすりや、向こうもこちらを立ててくれる。腹の中で何考えてるかは、わからんけどよ。

酒場の噂54

ドラゴンがヒルズファーの近くを飛んでたとよ。南じや何か起こってんじやないか。ダガーフォールの近くにも魔物が集まっているっていうしな。古い洞窟がいくつか、また活動を始めたっていうな。

酒場の噂55

コアミアの使節は、王様が姫様を見つけたって聞いて帰る準備をしてたんだけどよ。また、姫様が逃げ出したってんで、呼び戻されてやんの。

酒場の噂56

緑のローブを着た信者どもが、「穴」のあたりにいたってよ。古カビにしがみついてなきや生きられんのかね。

酒場の噂57

街ん警備兵は神殿から離れようとしちよる。権力争いにや関わりたくないんだろうぜ。



Mysterious Wand



酒場の噂58

ヴーンラーにも、犯罪者を戦わせる闘技場があればいいな。〈ズヘンティル城塞国〉みたいにさ。

酒場の噂59

紫の飾り布をつけた娘が、ユーラッシュの宮殿跡から宝冠を盗んで逃げたとよ。男と一緒に、門を馬で駆け抜けていったそうな。

酒場の噂60

巨大な影がいくつか森の上を飛んでいったな。南に向かってたようだ。

酒場の噂61

ストジャナウ川の沿岸は、また農場になりつつあるぜ。今じゃピラミッドも灌漑設備に使われてるよ。

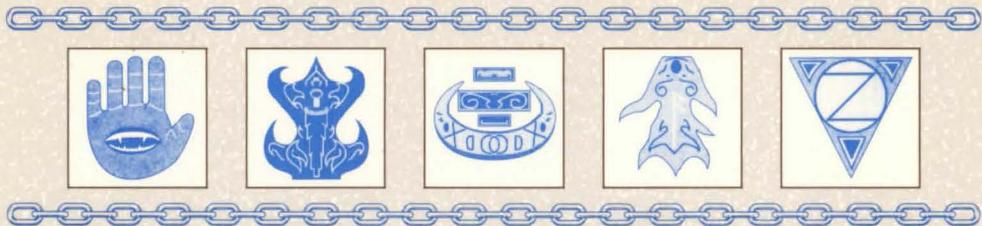
酒場の噂62

ゴンド神殿の前の最高司祭、ジャーリーはしばらく姫様といい仲でしたね。









STRATEGIC SIMULATIONS, INC.[®]

TSR, Inc.[™]

Curse of the Azure Bonds developed by Strategic Simulations, Inc.
カース・オブ・アジュア・ボンドはSSI社によって開発されました。

© Copyright 1989, 1991 TSR, Inc. All Rights Reserved. © Copyright 1989, 1991 Strategic Simulations, Inc. All Rights Reserved.

Presented by PONY CANYON Inc.

ADVANCED DUNGEONS & DRAGONS, AD&D, FORGOTTEN REALMS and the TSR logo are trademarks owned by TSR, Inc.

Lake Geneva, WI, USA and used under license from Strategic Simulations, Inc., Sunnyvale, CA, USA.

(アドバンスト ダンジョンズ アンド ドラゴンズ, AD&D, フォーゴトン・realm およびTSRロゴはTSR社のトレードマークで, SSI社の許諾のもとで使用しています。)

F98 E 5132

L98 E 5132